

貨幣と市民社会の起源

日本市民社会の源流を探る

平山朝治

人文社会科学研究所

モノグラフシリーズ
Monograph Series

VIII

筑波大学

比較市民社会・国家・文化特別プロジェクト

University of Tsukuba

Special Research Project on Civil Society,
the State and Culture in Comparative Perspective

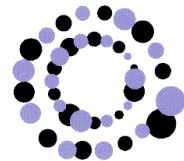
日本学術振興会 人文・社会科学振興プロジェクト

「多元的共生」の国際比較

JSPS New Research Initiatives for Humanities and Social Sciences

International Comparison of
Pluralistic Co-existence of
Societal Groups and Civil Societies

2008.3



目次

序章	1
第一章 理論とその検証	7
第一節 問題設定	7
第二節 先史時代の遠隔地間交易	11
第三節 交易発展のモデル分析	14
第四節 資本と名目貨幣の起源	22
第五節 縄文前期黒曜石交易の場合	31
第六節 女性の象徴としての貨幣	39
第二章 日本最初のコインと十字架	51
第一節 斉明女帝メモリアル銀貨	51

第二節	東南アジア規格と東ローマの影響	58
第三節	三位一体と日本国号（その1）	72
第三章	善光寺と日本の市民社会	81
第一節	キリスト教伝来と善光寺創建	81
第二節	三位一体と日本国号（その2）	100
第三節	善光寺の十字架	114
第四節	本尊受難の原因	127
終章		131
参考文献		141
附録	紙印刷版からの改訂について	153

序章

市民社会とは自由で平等な人々からなる社会を意味し、市民革命を経た近代西洋社会を基準として概念化されてきた。そして、西洋的な意味での市民革命を経た後に形成される市民社会と国家の関係においてのみ、公共性やそれを実現するための公権力と、社会生活を営む人々の自由や平等とが両立しえると考えられがちであり、西洋中心主義的な偏見にとらわれた事実認識や価値判断に陥りがちである。

このモノグラフは、西洋的な市民社会理解の根底にある、貨幣の起源や本質を交換手段とする説を批判して代替的な見方を提示し、それをふまえ、日本における貨幣経済や国家の形成・発展過程に即して、ウェスタン・インパクト以前の伝統的な市民社会や公共性の、日本独自のあり方や、それらが生み出した自由や平等といった価値がはらむ、文化的個性と普遍化可能性とを共に解明することを課題とする。

市民社会を特徴付ける個人の自由と平等は、貨幣を媒介とする商品交換が社会生活の根幹をなすようになること、そのような交換関係を基盤として形成されてくる。そして、西洋社会における自由や平等の概念は、貨幣経済について西洋社会で常識化している説に基礎付けられていると言えよう。すなわち、自由で平等な主体間の交換のために役立つような交換手段が貨幣の起源であり、その本来の用法だとする説であり、自由で平等な人々の契約として国家の形成を説明する社会契約論と極めて似ていることから、西洋中心主義的偏見と結びつきがちであることは明らかであろう。

この説はアリストテレスに発し、アダム・スミス以降の経済学における通説として継承されてきた。このモノグラフにおいては、西洋的な自由や平等の理念を相対化し、より普遍的な市民社会像を求めするための基礎作

業として、貨幣についてのこのような通説を批判し、代替的な見方を提示した上で、日本における貨幣経済と市民社会の起源を説明しようと試みる。

「第一章 理論とその検証」においては、貨幣の起源に関する理論的考察と、考古学・人類学的事実による検証を行う。定住生活の定着とともに遠隔地間交易が発達し、財がいくつもの共同体の間を移動するようになると、交易を仲介する共同体が情報上の優位を利用して剰余（人口増を可能とする財）を獲得するようになる。そして、蓄積した剰余財を活用する方途の一つとして、それを、より必要度の高い他の財と交換するようになった。このように、剰余の蓄積を前提に、交換手段としてその一部が用いられるようになった。すなわち、仲介利潤の獲得や剰余の蓄積は交換手段という貨幣本来の用法から派生したのではなくその逆である。このことを理論的に示し、考古学や人類学の知見と照合してその妥当性を確かめる。

以上のように貨幣の起源をとらえると、コイン（材質、大きさ、重さ、形状が一定の規格に従って作られた金属貨幣）は交換手段として使われるようになる以前から、国家の統合や富と繁栄の象徴とされ、再生や子孫繁栄のための副葬・呪術に使われていたことや、共同体間を移動してそれらの関係を媒介し、子供を産み育てる人口増加をもたらすという、女性の社会的機能と類似した役割を果たすコインが、女性的象徴性を帯びがちであることも、よく理解できるようになる。このようなコインの特徴は、日本における最初のコインにおいても明瞭にあらわれていることを「第二章 日本最初のコインと十字架」で示す。

日本最初のコインは和銅元（七〇八）年に発行された和同開珎であるとすする通説は、飛鳥池遺跡発掘で富本銭が七世紀後半にまで遡ることが明らかにされた平成三（一九九一）年に崩れた。大メディアの報道は富本銭こそが最古のコインであるという印象を与えるものであったが、天武一二（六八三）年四月一五日の詔「今よ

り以後、必ず銅銭を用ひ、銀銭を用ゐること莫^なれ」(『日本書紀』当該日条)にあらわれる「銅銭」が富本銭なので、富本銭より古くから銀銭が流通していたことをこの詔は語っている。

この「銀銭」は、古来、「無文銀銭」と呼ばれてきたものであるが、私は帆銀貨と呼ぶ。それは、天智天皇が創建したとされる崇福寺塔跡から戦前の発掘調査によつて出土したので天智朝まで遡ることもわかつていたものの、中国銭とは異質なその形態のためもあり、従来コインとして認知されることは少なかった。しかし、富本銭が和同開珎より古いことが認められるようになって、富本銭よりも前に発行された日本最古のコインとする立場が、近年有力になりつつある。ただし、大きさや重さは唐の度量衡に従っていると説明され、中華文明圏のコインの一種とされてきた。

私見によれば、日本最初のコインである帆銀貨は当時の東南アジア標準銀貨の大きさと重さに従つて作られており、七世紀後半ドゥヴァーラヴァティ(現在のタイ国チャオプラヤー川下流域)から漂着した人々が帆銀貨作成を指導して、天智即位のころに、亡き母斉明女帝に因んで発行されたものと考えられる。さらに、十字刻印がある帆銀貨は、インド海岸部に広まっていたネストリウス派キリスト教が七世紀後半の日本に伝来した物証であり、『日本書紀』の聖徳太子伝にはキリスト伝の影響があり、七世紀後半の日本にキリスト教が伝わったとする久米邦武説を裏付ける。

唐帝国の周辺で独自の銭貨を発行したのは、日本を除けば、早くから銭貨が普及していた西域諸地方のみであり、铸造量も流通範囲も限られ(榮原「一九九三」第六章 日本古代銭貨の国際的位置)、日本のように、六六〇年代後半にはじまる帆銀貨から一一世紀初頭まで流通していた乾元大宝まで、約三五〇年間も継続した事例はない。このことも、日本のコインの源が実は中国銭貨ではなく、西方コインの流れを汲む東南アジア銀

貨であり、女性的象徴性を帯びて地金価値通りの価値で流通しはじめたため首都とその周囲に普及して、天武一二年の銀銭使用禁止詔が三日後に、「銀を用ゐること、止むること莫^なれ」(『日本書紀』天武一二年四月一八日条)と、事実上撤回されて帆銀貨が流通し続け、天武が発行した富本銭は、出土例から推してあまり流通しなかったように、権力者の恣意を覆すほどに貨幣経済の自律性が確立しており、西域から中国に伝わった景教ではなくインド・キリスト教の伝播を伴うものであったことから、容易に説明できる。

古代日本に伝来したキリスト教は、地獄に堕ちた後復活した斉明女帝の勅願によって創建されたと伝えられる善光寺のなかで保存されてきた。遣唐使が唐文明を直輸入するようになって、帆銀貨に代わって中国銭を模した和同開珎が発行され、善光寺本尊も唐の正統的仏教からみていかかわしいものとされたため、信濃へと追いやられたのである。

従来、律令制国家は、全く未経験のコインを、しかも銅地金価値よりかなり高い名目価値で流通させるために、種々の策を用いたという風に、日本におけるコイン経済は国家が主導して上から形成されたと力説されてきたのであるが、以上のようにとらえると、天智朝において導入された帆銀貨が、女性的象徴性を帯び、一定重量に整えられていたために、たいした国家的強制もなしに流通するようになっており、皇朝十二銭は帆銀貨が開拓していた流通域を受け継いだにすぎず、皇朝十二銭の中国的特徴は外見にすぎないことが明らかにになる。また、東国に追いやられたとはいえ、中国文明とは異質で、唐に伝わっていたシルクロード経由のネストリウス派景教とは異なって偶像忌避の傾向が強いインド・キリスト教が、善光寺信仰のなかに保存された。これらことは、日本が単なる中華文明の衛生文明とは異なる独自の文明を育むことを可能にした、根本的な条件であったと思われる。それによって、律令国家から相対的に自立した諸力が見かけ以上に強く、国家の強権と拮

抗しうるような、日本独自の市民社会や、自由・平等といった価値の形成と普及が可能になったと思われるのである。「第三章 善光寺と日本の市民社会」は、このような善光寺信仰に焦点を当てて、日本における市民社会の源流を探る。

従来から、ユーラシア大陸の東端に位置する日本と西端に位置する西欧との間には、封建制の発達など歴史や社会構造に著しい類似があることは指摘されてきたが、それは歴史的な共通の根源に由来するものであった。日本の貨幣経済は、中国起源の銅銭ではなくリディア起源の西方銀貨によって始まり、それと同時にキリスト教も伝来して聖徳太子・善光寺信仰のなかに保存されてきたというように、日本市民社会の伝統は、東アジアにおいては例外的に中華文明の圧倒的影響力に抗して西欧と共通する起源に発する独自性を育んできたのである。

